

原点に立ち返って考え直す教育実践について

私の「社会学フィールドワーク」

矢谷 慈 國 (人間学部社会学科)

序

私は1971年4月、追手門学院大学文学部社会学科に助手として就任して以来、第 表のような、授業を担当し、それと並行して、教室の外における分尾キャンプ、調査実習、レッスン、野草を食う会、芋煮会などの行事を行ってきた。

この表のうち、「電気ガス水道のない山の中で食うこと寝ること遊ぶこと、そして学ぶこと」というテーマで22回にわたって行ってきた「キャンプ実習」に関しては、既に7編の論文の形で報告と考察を行い、関連する「食と農と自然」に関する論文3編と共に、『原点に立ち返って考え直すこと キャンプ実習と食と農の教育 』（明文舎印刷、2003年）という形で出版している。

1987年度の一年間、私は「内地留学」という形で、栃木県西那須野町にある、アジアの農村開発のためのユニークな農民リーダー訓練を行っている「アジア学院」で学んだ。このアジア学院での成果は、拙著『生活世界と多元的リアリティ 現象学から社会学へ 』（関学生協出版、1989年）において論述している。

1988年4月、アジア学院から帰任して以来、当初は大学の空き地を利用して、1993年よりは、大学近辺の田(1.5a)と畑(2.5a)を実習地として地元の農家より借用して、「有機農法、自然農法」の実験を開始した。

当初は矢谷個人と、ボランティア学生有志の取り組みであったこの実験の積み重ねは、文学部社会学科から、人間学部社会学科への改組が行われた、1993年度より、「社会学フィールドワークA」(通年週1回90分、3年生以上、4単位)という名称で、単位認定を行う専門科目としてカリキュラムの中に位置づけられることになった。

以下、その「社会学フィールドワーク(2003年度からは人間学フィールドワーク)」における、教育実践について、その概要と考察を記述する

原点に立ちかえって考え直す教育実践について

第 表 追手門学院大学社会学科で矢谷の行ってきた授業, キャンプ, フィールドワーク, 調査実習, からだ, こえ, ことばのレッスン, KJ法演習等の記録

年	担当科目	分尾キャンプ調査実習, KJ法講習, からだ, こえ, ことばのレッスン	野草会, 芋煮会
1971	社会学	4/10-12丹後半島過疎地調査(吉田, 矢谷, 学生2名)	
72	初級演習, 社会学	4/3-7分尾キャンプ(吉田, 矢谷, 学生6名) 8/21-9/6喜界島, 沖縄調査(矢谷, 学生2名)	
73	初級演習, 社会学, 外書講読	4/6-9分尾キャンプ(吉田, 矢谷, 学生5名) 4/12-15越前大野調査(杉本, 矢谷, 学生4名)	
74	初級演習, 社会学, 外書講読	3/2-4津山, 郡家調査(吉田, 矢谷, 学生3名) 4/2-5佐治村(吉田, 矢谷, 学生3名)	
75	初級演習, 講読実習, 社会学, 外書講読	7/17-20分尾キャンプ(矢谷, 吉田, 学生50名) 7/7-8矢谷, 吉田, 川喜田研究所のKJ法講座に参加	
76	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 社会学, 外書講読	7/18-21分尾キャンプ(矢谷, 学生38名) 学生企画のキャンプ	
77	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 社会学, 外書講読	3/15-19, 6/12-13, 7/12-14 KJ法講習会(吉田, 矢谷, 学生10名余)	
78	初級演習, 講読演習実習, 卒論演習, 社会学, 外書講読		
79	1979年7月より		
80	1980年8月まで 西ドイツビーレフェルト大学での在外研修		
81	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学	8/4-7分尾キャンプ(矢谷, 学生29名)	
82	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学		
83	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学	8/3-7分尾キャンプ(矢谷, 学生35名)	
84	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学	8/17-20分尾キャンプ(矢谷, 学生21名)	
85	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学	7/8-11分尾キャンプ(矢谷, 学生24名)	
86	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学	7/16-19分尾キャンプ(矢谷, 学生18名)	
87	1987年4月より88年3月まで, 栃木県西那須町アジア学院での国内研修		
88	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学概論	大学の空地で, 自然の農法の実験開始	
89	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学概論	11/11-12 からだ, こえ, ことばのレッスン(矢谷, 学生25名)	
90	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学概論	6/23-24 からだ, こえ, ことばのレッスン(矢谷, 学生25名)	7/7枝豆会, 10/29芋煮会
91	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学概論	7/21-24分尾キャンプ(矢谷, 学生17名)	7/7枝豆会, 12/7芋煮会
92	初級演習, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学概論	7/21-24分尾キャンプ(矢谷, 学生34名)	7/9枝豆会, 10/29芋煮会
93	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学の考え方	7/23-26分尾キャンプ(矢谷, 学生34名, OB1名)	11/18芋煮会
94	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学の考え方	9/2-5分尾キャンプ(矢谷, 学生22名)	7/7枝豆会, 12/15芋煮会
95	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学の考え方	7/21-24分尾キャンプ(矢谷, 学生36名, OB5名)	4/21野草会, 11/25芋煮会
96	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学の考え方	7/20-23分尾キャンプ(矢谷, 伊田, 学生21名, OB3名)	4/21野草会, 11/29芋煮会
97	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学の考え方	7/25-28分尾キャンプ(矢谷, 藤原, 学生13名, OB6名)	5/6野草会, 10/25芋煮会
98	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学の考え方	7/25-28分尾キャンプ(矢谷, 藤原, 学生45名, OB1名)	5/7野草会, 10/22芋煮会
99	社会学の考え方, 講読演習, 卒論演習, 知識社会学, 社会学概論	7/24-27分尾キャンプ(矢谷, 藤原, 加村, 学生18名, OB7名)	4/23野草会, 10/28芋煮会
2000	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 社会学概論, 社会学の考え方	7/21-25分尾キャンプ(矢谷, 藤原, 西川, 学生42名, OB8名)	4/27野草会, 10/26芋煮会
01	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 社会学概論, 社会学の考え方	7/20-23分尾キャンプ(矢谷, 藤原, 西川, 学生30名, OB1名)	4/27野草会, 10/25芋煮会
02	社会学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 社会学概論, 社会学の考え方	7/20-23分尾キャンプ(矢谷, 藤原, 西川, 学生28名, OB3名)	4/24野草会, 10/20芋煮会
03	人間学フィールドワーク, 講読演習, 卒論演習, 社会学概論, 社会学の考え方 生活世界論, 知識社会学, 新人生演習, 人間学演習	8/1-4分尾キャンプ(矢谷, 西川, 藤岡, 学生17名, OB4名他)	4/24野草会, 10/20芋煮会

第一章 私の「社会学フィールドワーク」のコンセプト

1993年度からカリキュラムの中の一科目として位置づけられるようになった、この授業の、年度ごとの受講者数、田植と稲刈の日程、玄米の収穫量を表にしたものが第 表である。

表から読み取れるように、各年度の受講者数は最少3名最大29名というふうに変ばらつきが多い。選択必修科目であるので、学生の側には、この科目を選択しないで他の科目で単位をそろえる自由がある。前年度この科目を受講した学生の評価や評判が口コミで伝わり、次の年度の受講者の数が決まってくるようで、この受講者数の変化は、受講可能学年の変更（2000年から2年生から受講可能になり、2003年度からは、心理学科の2年以上の学生も受講可能となった）以外の要因については、理由がわからない。1999年度の受講者がゼロなのは、私が「社会学概論」の授業を担当しなくてはならなくなって、「社会学フィールドワーク」の授業は、その年度だけ不開講となったからである。実習田と畑の作業は、この年度は、社会学講読演習（矢谷ゼミ3年）の受講者を中心にして行われた。

表でわかるように、1993年度においては、まだ大学内の空地（グラウンドの西側斜面と学外の畑（1.5a）のみを実習地としていたので、米作りは行っていない。季節の野菜や根菜や豆類、（白菜、キャベツ、ホーレン草、小松菜、野沢菜、チンゲン菜、さつまいも、里芋、ジャガ芋、玉ねぎ、トマト、キュウリ、アスパラガス、ナス、枝豆、トウモロコシ、黒豆、エンドウ豆、インゲン豆、大根、人参、ピーナッツ、スイカ、イチゴ、ヒョウタン等）を、有機農業（農薬、化学肥料を使わない）のやり方と自然農法（アジア学院で出会った福岡正信氏や川口由一氏のやり方で、雑草を敵視しないで、作物が雑草に負けそうになる時だけ、雑草を刈ったり抜いたりして手助けする）のやり方を並用しながら、学生たちと育てる実習を行った。

この授業のコンセプトは、「実際に体を動かして、直接土や作物や雑草とふれあい、観察したり、手助けしたりする中から、人間と自然の関わりを、肌で感じつつ学んでいくこと、その作業を仲間や教師と共に行う、直接的な人間と人間の関わりを学ぶことが、すべての学びの原点だ」ということにある。この人間と自然、人間と人間が直接関わりあう原点において、体を動かしつつ学ぶ、実感と体験からスタートして近代社会の資本主義経済の論理や生活様式が、食と農に関わる問題、地球全体のエコロジーに関わる問題、世界規模で人間と自然、人間と人間の関係のあり方に与えている諸問題へと、考察を拡げ、深めていくことをめざしている。

私は農業に関しては素人でしかなかったが、1987年のアジア学院での1年間の研修、88年から大学の空き地で自然農法の実験を続けてきた経験、自分も畑作りをしたいと申し出られたので私の小作人となってしまったが、科学的見地からの作物や土壌について、私よりはるかに知識や経験の多い藤原一郎先生（当時経済学部教授、自然科学関連科目担当）の教示をうけたりしながら、手さぐりで、実験をくりかえしてきていた。

第 表 1993年～2003年 フィールドワーク

年	受講者 男女 学年	計	田植	稲刈	収穫量
1993	(3年)男子9名,女子0名	9			
1994	(3年)男子4名,女子1名	5	6/7	10/8	90kg
1995	(3年)男子7名,女子2名	9	6/6	10/7	92kg
1996	(3年)男子3名,女子0名	3	6/13	10/11	90kg
1997	(3年)男子1名,女子3名	4	6/10	10/7	88kg
1998	(3年)男子5名,女子13名	18	6/9	10/3	92kg
1999	フィールドワーク授業なし。 ゼミで田畑を作る	0	6/8	10/8	85kg
2000	(2年)男子6名,女子3名 (3年)男子9名,女子10名	29	6/6	10/10	91.8kg
2001	(2年)男子12名,女子6名 (3年)男子0名,女子1名	19	6/5	10/9	87kg
2002	(2年)男子1名,女子4名 (3年)男子2名,女子8名	15	6/4	10/11	65kg
2003	(心理2年)男子5名,女子2名 (社会3年)男子2名, (心理3年)男子1名	10	6/10	10/22	90kg

また、私と藤原先生の二人が中心となって、生物部や社会学科学生委員会の学生諸君の協力を得て、枝豆パーティー（後に野草を食べる会）や芋煮会を行ってきた。当初は10数名だったが参加者も、徐々に増えてゆき、最近では毎回80人～100人の、学生、教職員、社会人などが参加する会となっている。これらの会は「教員も学生も職員も社会人も自発的に集まり、飲食を共にしながら、自由に話しあうことができる自由空間の創出の試み」として、15年間にわたって実施され続けている。

文科系大学の人間学部社会学科で、農学部でもないのに、こういう実習で単位認定を行うということや、必要な種や苗や有機肥料や農具を研究費で買うことも、発足当時においては異例のことであった。しかし、私のこの授業を新設する提案は、社会学科の学科会議で承認され、実現するに至った。最近では、入学案内の大学、学部紹介のパンフレットにも、社会学科の特色ある授業の一つとして、とりあげられるようになった。

この授業に対する学生たちの最初の反応は、「何でこんなこんなことをするのか」という授業の意味づけがつかめなかったり、作物の世話をする作業そのものや、野外で出会う、虫やミミズや風や雨や陽光の暑さなどとの関わりで、不慣れでうまくできなかったりという、とまどいである。また、「こんなことをやらせる矢谷センセイはいったい何を考えているのだろう」という教師に対する疑問も起こりうる。

都会育ちで、小学校で朝顔の種をまいて観察した以外は、農作業などしたことがないという、

[] 体験型学習の実践

大部分の学生はもとより、家が農家でおじいさんの農作業を手伝った経験があるという学生でさえ、現在の日本の若者たちは、基本的に、農業や自分が食べる食物を作るという経験に欠けている。特に欠落しているのは、種から芽生え、育ち、実り、人間がその実りを味わった後、その作物は枯死するという、「いのちのプロセスの経験」である。

しかし、共に自然の土や作物や雑草と取り組む活動を続け、なぜ、いまこの作業をする必要があるのかの説明を聞いたり、作物が雑草に負けたり、負けなかったりしながら育っていくプロセスを観察したり、実りを共に味わったりするうちに、そのプロセスそのものを楽しみ、そこから学ぶことができるようになってくる。こういう、手ざわりや実感をともなった経験を通して学ぶということと、「教室での勉強」で学ぶ抽象化され概念化された知識を、一人一人の学生の体と頭の中で結びあわせることができた時にのみ、その知識は本物のものとなり、異なる状況に対しても応用ができ、他者に伝えることができる身についた知識となる。

戦後の日本の教育が「偏差値管理教育」の方向に一貫して変化していく中で、最も欠落させてきたことが、頭で理解したり暗記する知識と、体で実践し体験する知識とを結合する、体験学習や実習の教育であったことは、多くの識者の指摘するところである。

フィールドワークの受講者には、夏休みの分尾キャンプ実習と、春の野草を食う会、秋の芋煮会への参加を課しているのは、そういうねらいを、より徹底するためである。成績評価は、出席を重視し、作業への取り組みのあり方への評価と、キャンプ実習の感想文の提出、年度末には、エコロジーや食と農の問題と近代社会の問題に関連する参考文献リストの中から、関心のあるものを一冊選んで400字詰10枚程度の、必ず内容の要約と、本人の論評を備えたレポートの提出を行わせ、総合的に評価を行ってきた。

第二章 水田を借りて米作りに挑戦

1994年5月19日、畑として借りていた水田(1.5a)について、「ここは水はけが悪く、稲を作った方が土地にも合っているし、田起こしや水の管理、苗の用意などは、自分の田の作業のついでにしてあげるから、米を作ってみませんか」と、地主の吉田利光氏が申し出てくださいました。畑用の土地としては、少し離れた所にある、元畑だった2.5aも借用できることになった。この畑のまわりには5mくらいの白梅と紅梅の木と、道路ぞいに数本の桜の大木、3本の甘柿の木が生えていて、それらの木の実も利用できるようになった。

それまで、スクールバス道ぞいの三角形の水田(1.5a)を畑として使うために無料で借りていたのだが、「田に稲を作るとなると、水利組合の管理費などもあるでしょうから、実習地使用料を取って下さい」と吉田氏に申し出て、年間2万円を、田(1.5a)と畑(2.5a)の実習地使用料として受け取っていただくことにした。この費用は、「特色ある教育予算」から支出されることとなった。

原点に立ちかえって考え直す教育実践について

日本の歴史、文化、社会にとって、稲作共同体の特性が意義をもってきたことに注目している私にとって、小さい田んぼであっても、そこで「米」を自分で作る経験ができるということは、特別の意味があった。農地法や減反割当てなどの制約が強くて、都会人の非農家の一般市民が「米」を作ることは大変困難な状況にある。それが地主さんの好意で、しかも土ごしらえや水の管理、苗の準備などもしてもらった上で「米作りの経験」を学生たちと共にできるということは、私にとっては、大変ありがたい申し出であった。

フィールドワークの授業における初めての田植えは、1994年6月7日(火)、1時限目に、学生12名、教員は矢谷と加村先生(生物学担当)が、吉田氏の指導のもとに行った。

学生たちも教員も泥田に裸足で入り、その中でしゃがんで、シュロ縄で張った条線にそって、20cm間隔で、田植機用のプラスチックトレイに育てられた20cmほどの苗を3~4本根の所からちぎり取って、根が土にしっかりと定着するように植えつける。慣れない作業なので苦労していたが、泥田の感触に慣れてくると、作業の進み方も早くなり、90分の授業時間中に全部植えつけることができた。

「この田植の姿勢と体の使い方は、2000年近く日本文化の「身体技法」の基本となってきたもので、日本の芸能や武道の動きの基礎になっていること」、「水稲作の村落共同体での人間関係が、常に他人の目や、他人のすることを気にして、それに合わせようとする、日本人の社会関係と個人のあり方の基本となっていて、米作りなど全くしたことがない、現代の日本の社会や学校やクラブなどでの日本人の大人や君たち若者にも、そのパターンがしみついていることを自覚化すべきこと」などを矢谷が話した。

米作りの方法としては、苗の初期の分蘖を良くするために必要だからという、吉田氏の説得を受けて、スタート時に一回だけ石灰30kg、化肥10kgをまくことにした。田を提供した地主さんとしては、成果である米の収穫量が、田の広さに見合っただけで充分であることが重要だと配慮されてのものだと、推察したので、無化肥主義を固執することを避けた。しかし化学肥料の散布はこの一度だけであった。

除草剤をまかないので、カヤツリ草科の細い水草と、紫色の小さな花をつける水草とヒエが生えはじめた。7月5日の授業で50cmくらいに育った稲の間にはいつくばって、水草取りを行った。抜き取った草は田の畔に植えた黒豆のまわりに積みあげて、肥料とした。この作業は、稲の葉がチクチク顔や手足にさわり、しゃがんだ姿勢で炎天下で行うつらい作業であったので、学生たちは悲鳴をあげて、90分の授業時間内に出席した5人の学生のみでは終了しなかった。その日の放課後、残りの作業を矢谷が一人で行い、何とか一回目の草とりを終えた。

9月末になると稲の穂が充実してきて黄色になって垂れてくるのが、スクールバスの中からも観察されるようになった。ヒエの穂も稲穂に混じって伸びているのがたくさん見えたので、ヒエ抜きも行った。

10月8日(土)午後1時から4時30分、学生6名と矢谷が、吉田氏の指導で初めての稲刈を

[] 体験型学習の実践

行った。右手の三日月型ノコギリ鎌で、左手につかんだ稲束を、3～4束刈って一つにまとめ、ワラ2～3本で束ねる作業に2時間余り、2m程の三脚の稲木の支柱をセットして、長い竹を渡した稲干し場三列を組み立て、それに束ねた稲を二又に開いてかけていく、稲かけ作業に1時間半くらい、参加者は熱心に取り組んだ。必要な道具はみな地主の吉田氏が用意して下さり、ワラでの稲束のしばり方、稲干し場の組み立て方、稲のかけ方等すべて指導して下さいました。

現在ではほとんどの農家は稲をコンバインで収穫し、天日干しをする手間を省くようになっていて、地主さんも自分の田ではそうしている。しかし天日干した米の方が味がよいということも勿論であるが、プロセスそのものの経験を重視したので、地主さんにたのんで上記の作業を昔どおりの形で行うことができた。

天気が良かったが暑すぎない気候となっており、収穫の手ごたえが目の前にあるので、学生たちも張り切って、これらの作業に取り組んだ。そしてすべての稲束を竹のハサにかけ終えた時には、ホットした安堵感と充実感があつた。

この米は、一週間余り天日干しされ、同じ田で、地主さんによって脱穀、モミすりがなされた。玄米90kgの収穫であったことを10月25日に告げられた。「あの田は昔作っていた時には60kgが平均の収量であるが、今年は夏中雨が降らず天気続きであったのと、あの田が水の充分ある田だったので90kgの大豊作となった」とのことだった。90kgの玄米は精米され、80kgの白米と10kgのヌカの形で大学に届けて頂いた。

参加学生たちと、社会学科教員全員に1kgくらいずつ、ビニール袋に小分けして分配し、残りは、秋の芋煮会と来春の野草を食う会で使うことにした。天日干し、無農薬、1回化肥散布のみの有機農法で、除草を手で行う形で作られた米の味は、学生やその父母や同僚たちから「大変おいしかった」という好評をえた。私としても、かみしめて、これほど納得ができて、味のよい米を食べたことは初めての経験であった。そして、稲の種の力、生命の力、自然の力と、人間の働きによって、結実したこの米は、除草剤や農薬や化学肥料や農業機械等の人為に満ちて作られている市販の米よりも、「いのち」としてはるかに立派な米だと実感した。

自ずと讚美歌422番が口をついて出てきた。「我ら耕し、種をまけど、雪霜送り雨をそそぎ、日にて温め風を吹かせ、育て給ふは、ただ神なり、良きものみな神より来ぬ、豊けき恵みを、ほめたたえよ」

そしてこう考えた。「食う我と、われらが作った米は、共にいのちである。いのちがいのちを食っていて、おいしくて、豊かであり、しかも食われた米はわれらに恨みを述べることはない。」これが命と命のつながりであり、動物であれ植物であれ、食わねば、栄養を外から取らねば生き続けることができない。わたしのいのちが、他のいのちを食うことによって、わたしのいのちが支えられているという、食う体験から引きだせるいのちといのちの連続の体験、即ち、ユニバーサル・プロジェクションの体験を、再確認したのである。

米を自ら作って、そのプロセスに汗を流してよりそい、その実りを食い味わうという人間の営

みは、そのようなことを実感させてくれる出来事なのである。

米づくりを実習できるようになり、梅の木や柿の木つきの2.5aの畑もつかえるようになってから「社会学フィールドワーク」の実習の内容がより豊かなものとなっていった。田での米作り、畑での野菜栽培に加えて、以下のような活動が加わっていった。

- 1) 野草を食う会のため安威村の畑や田のまわりの畔や空き地からの野草の採取。四月末にノビル、フキ、ヨモギ、カラスのエンドウ、クコの葉、アケビの芽や花、柿の若葉、茶の新芽、タラの芽、ワラビ、クズの芽、大学の竹藪から竹の子などを採取し、天ぷらや和え物にして野草を食う会に提供している。
- 2) 畑の向かいの土堤の竹藪に放置された茶の木がたくさん生えているので、5月初めにその新芽をつんで製茶の実習を行うようになった。
- 3) 畑の中にある紅梅と白梅は、ともにたくさんの実をつけるので、6月中旬に収穫し、梅酒と梅干を作るようになった。
- 4) 畑の端に一本苗を買って来て植えたブラックベリーの一つが土にあったのか大きく枝を拡げ、株も増えてゆき、たくさん実をつけるので7月中旬に生でも食べるが、ブラックベリー酒を作ることができるようになった。
- 5) 11月中旬になると、柿の木がたくさん実をつけるので、柿の実とりを行い、みんなに分配している。
- 6) その他、畑で取れた、シソの実のつくだ煮、ジャガイモやコーンの試食会など、季節毎に生長する作物を使って、料理を楽しんでいる。

第三章 2003年度「人間学フィールドワーク」の記録

ここでは最近の1年間の実習の矢谷による記録と学生のノートから、その内容を記述する。授業は毎週火曜日4限。

4月8日、雲のち晴

最初なので教室に集合、授業の進め方を説明。自然農法、有機農法を田と畑で作る実習を行う。全員に新しい大学ノートを渡し、その日の作業、矢谷の言動、畑の状態、感じたことなどをメモするように指示する。

体験をことばにすること。五感を働かせて体験する、感じる、考える、言葉にする、知識化するというプロセスに自覚的になること。

まいた種は自分で刈る。食べ物を自分で作って自分で食う経験をする。

4月24日午後5時より、生物学実験室で野草を食う会を行う。1時30分からの準備作業に参加すること。

[] 体験型学習の実践

6月上旬に田植え，夏休み初めに3泊4日の分尾キャンプを行う。キャンプの感想文を提出すること。感想文集を作る。10月上旬に稲刈，10月下旬に芋煮会を行う。

成績評価は春と秋の学期末にノートを提出させる。最終の2ページ以上に，その学期にやったこと学んだことのまとめの文を書くことを課す。晴耕雨読の原則で晴天の日は畑へ集合，雨の日には教室に集合すること。

以上の説明ののち，校内近くの田や畑へ移動。移動途中に，2号館前の藤原一郎先生がやっておられる畑，矢谷の植えた茶の木，学内の植木の名称や用途，竹藪の竹の植性など話をしながら降りる。

この日，畑では桜がまだ咲いていたので，畑の内容と説明ののちは，ビニールシートを畑に敷いて，花見と自己紹介を行う。

「学校には，月桂樹の木があり，(葉を)干してスープなどに使う。キンカンもあり，初めて食べたけど，私はあんまり好きでなかった。みぶなもあって，つけものやおひたしにするとよい。……畑は自然農法でお百姓さんのように草をすべて取りのぞき，たがやして種をまき，きちんと手入れをして育てるのではなく，育っている食物よりも大きくなった雑草だけを取り除き，その他周りにはえている雑草はそのままにしておくというものである。そうすることによって作物自体が雑草に負けないようにと，強くまた味のしまったものになる。つまり，きびしい環境であえて育てるというものである。(3年女子)」

「畑の状態。自然農法とかで草だらけ(びっくりした)。色々な種類の作物を栽培しているが，良否はよく判らない。(3年男子)」

4月15日 雨のち晴

草刈り，畑の畝作り，徒長した菜の花と雑草を刈り，土を耕し，油粕をまぜて畝を作る。種が散ってあちこちに生え出している矢車草を一ヵ所に移植，エンドウ豆の柵の補強。小芋の種イモ植え付け。

「畑での作業は生まれてはじめてだったので，どうしていいか分からなかったが，たのしかった。……何か土のにおいが心地よかった。次にした作業はこいもを植えることだった。どれくらい掘ればいいのかわからなくて25cmぐらい掘り植えていると，先生に，こいもの2倍くらいの深さでいいと言われ，やり直した。まだまだわからないことがあるなか，作業を重ねるにつれて学んでいこうと思った。(3年女子)」

4月22日 晴

クワとスコップをもって大学の竹藪に移動。竹の根の張り方と竹の子の生え方の説明の後，矢谷が見本を示して竹の子を掘って見せる。その後2人一組で10数本掘らせる。

24日の野草を食う会のために，ゆでる作業。竹の子のゆで方を教える。その後，掘り立ての竹の子の皮をむき，しりの方から棒でタテに穴をあけ，醤油と味醂を注ぎ込み，アルミ фольでつつみ，竹藪の中で火をたいて蒸し焼きにする。全体に火がとおったのち，みんなで味わった。

思いの外うまいのでみな感心する。

「タケノコの根っこをとるのが大変だった。友達と力を合わせてすごく大きなタケノコを掘りだした。……全部で15本くらいになった。小さめのタケノコを焼き用，中ぐらい，大きめのタケノコをゆでる用にした。(3年女子)」

5月6日 晴れのち雲

畝を作って，トウモロコシ，小松菜，春菊の種をまく。種は大体本体の3倍くらいの深さに土の中へ入れる。絹サヤエンドウ，スナックエンドウがたくさん実っていたのを収穫して雲谷齋(地主さんから借りている田の近くの矢谷の書齋)へ移動。エンドウをゆでてマヨネーズをつけて試食。希望者に持って帰らせる。

5月13日 晴

30本のさつま芋の苗を植えつけるために畝をつくり，植える。買ってきた，ナス，キュウリ，シシトウの苗を植えつける作業。

土堤の茶葉，大学2号館前に植えた茶の木の茶葉を二手に分かれて採取する。

雲谷齋に移動して製茶実習を行う。4分ほど蒸し器で蒸し，葉をさましてから，両手につつまえるくらいの葉をとって，両手に力を入れて500回くらいもむ。よくもむと茶の成分が湯にとけ出しやすくなる。しっかりもんだ茶葉をクッキングペーパーを引いた竹のザルの上にていねいに拡げて完全に乾くまで干す。

もみ終わったまだ生の茶を急須に湯を注いでいれて，試飲。水色がきれいな若緑色になって，少し生ぐさいが，甘味のある茶を味わう。茶についてのウンチクを講義する。

「今日はお茶の葉をつんだ。先生にお茶の葉を教えたもらったが，はじめはいまいち見分けがつかなかったがすぐに慣れた。……友達とでかなりの量をつんだが，雲谷齋でお茶の葉をむしてもんだら少量になった。(3年女子)」出来たてのお茶は抹茶のようで，甘みがありおいしかった。(3年男子)」

5月27日 晴

スイートバジル，カラーピーマン，オレンジチェリーの苗を植えつける。エンドウが枯れてきたので竹の棚を外して，堆肥場へ移し整地する。キュウリの棚をつくる。

雲谷齋に移動。先週作ったお茶を試飲。全員に10gずつ配布。

「イチゴができていくか見にいくと……消えていた。これは肥料を根もとにやりすぎて肥料まけをしてしまったのだ。根まで消えていた。残念。先々週乾燥させたお茶の葉を飲んだ。なかなかおいしかった。みんなで分けて持って帰った。(3年女子)」

6月3日 晴

トマトとナスの支柱を立てる。ジャガイモの芽が出ているまわりの草取りと，土寄せ作業を行う。青梅が実っていたので8kgほど実をつむ。雲谷齋に移動して実のへたをとり，洗って乾かしたのち梅酒につける。

[] 体験型学習の実践

「梅酒にするため、梅のへたをとった。去年作った梅酒を飲ませてもらった。あまりお酒はのめないのだが、すごくおいしかった。(3年女子)」

6月10日 小雨

田植えの日。小雨であったが決行する。時間内に終了。雲谷齋に移動。早苗饗(さなぶり)を行う。

「今日は田植えをした。初めてで泥がきもちわるかったが、慣れて心地よくなった。20cm幅ぐらいで、根が切れないよう苗を少しずつとり植えていった。雨だったので少し疲れた。でも田植えの作業の後、雲谷齋で焼肉を食べた。疲れていたのでたくさん食べた。(3年女子)」
「ズボンとシャツを着替えて田植えに参加した。苗の感触は2年振り、楽しみにしていたので土の感触と共に心地よかった。雨のことは少しも気にならない。狭い田んぼだけれども、みんな真剣に植えていたのが頼もしく思えた。嫌がるのかなと思っていたのだが、そんなことはなく、むしろ楽しんでいるような感じであった。子供の頃、田植えを手伝わされるのが嫌だったけど、今は楽しくて(もっとも、遊び半分で短い時間なのだから当然かも知れない)仕方がない。……田植えだけでなく、田起こしから学生にやらせてみてはどうだろうか。機械ではなくクワで耕すところから始める。週一回の授業ではとても無理か。田植え、稲刈の経験だけでも貴重であり普段なかなかできることではない(3年男子、社会人学生59才)」

6月17日 曇

梅雨で伸びた雑草を刈る作業。黒豆とネギをそれぞれの畝を分担して植えつける。ジャガイモの試し掘りをしたがまだ小さかった。

「多彩な作物が植えられているので楽しみな反面、どう世話をしているのやら困ってしまう。でも何とか次々と収穫できるので面白い。先週田植えした稲、何とか根づいているみたい。バスの中から見ているだけなのでよく判らないが、そんな気がする。(3年男子)」

6月24日 曇(直前まで雨)

傘をさして畑へ集合の指示を出す。雨上る。ジャガ芋を収穫して雲谷齋へ移動。ジャガ芋をゆでて、塩とバターで味付けして試食。「ジャガ芋を収穫した。雨上がりだったのでミズがいっぱい土の中から出てきていた。(3年女子)」
「メインのジャガ芋、期待どおりであった。……味は良かった。どこで採れたのか分からないものと違い、自分たちが育てている畑で取れたものだから安心して食える。(3年男子)」

7月1日 小雨

春学期最後の日なので雲谷齋へ集合、春学期のレビューと討論を行う。キャンプの案内書を渡す。実習ノートの提出方法の指示をする。その後「状況の定義」「プロセスの知」「無知の知」「場面を見て、自分で判断して自ら動くことのできる知」「人間本位の観点とエコロジー的観点がちがう」「原点にもどって考え直す」などのテーマについて、話し合う。

「プロセスを知ることで、初めて物事の本質を知ることができるということに、すごく共感し

原点に立ちかえって考え直す教育実践について

た。知るを知るとし、知らざるを知らざるとせよ、これ知るなり、この精神は人として成長する上で大切なことだと思った。(3年女子)」「人間学フィールドワークを受講した理由は今までしたことがないことを経験したかったからである。実際に授業を受けてみるとそのことはすぐ満たされた。……すべてが新しい経験であった。……はじめは自分が何をすればいいのかわからないという状況に陥りがちであった……自分の今持っている知識が何の役にも立たないということを知った。畑の作業を行うにあたっては、自主的に観察し、考え、行動しなければ何もできないのである。……この授業を受けてから、他の畑や田んぼに目がいくようになった。今で気にもとめなかったものが今では自分の生活の一部となっており、今まで見えていなかったものが見えてくるような感じがして、「自分の世界が広がった」ような気がした。……とにかく自分で考えないといけない。考えないと始まらない。そして、考えたことを行動に移していくことが求められる。そうすることで体験が初めて意味を持つものとなるのである。それが体験学習の難しさであり、魅力でもあると感じた。(3年女子)」

8月1日～4日、分尾キャンプ、(兵庫県城崎郡日高町羽尻区河畑小字分尾)参加者24名。感想文集『山中、食寝遊而學、2003年分尾キャンプ記録』に詳細が記述されている。

9月30日 晴暑日

秋学期最初の授業。夏休みの間に畑いっぱいにはびこった雑草の刈り取り。刈った草は堆肥場に山積みする。

雑草に負けずあちこちに大きく育っている青ジソの実を収穫。実のついた穂先をつみとってきて、柿の木の陰にビニールシートをしき、そのうえに坐って、実を指でこぎとる作業を行う。蚊が出て、刺される者が多いので、たき火をして、生のヨモギをその上に置いて煙でいぶす。

「青ジソの実を指でしごき取って佃煮にする方にまわる。けっこうめんどうな作業で右手も左手も指先がシソのアクで赤くなってしまった。それと柿の木の下で作業していたので蚊の多いこと。いっぱい刺された。草をいぶした煙で蚊を追い払ったがとてもケムタかった。(帰ってから、この煙臭いの何してたん！と言われた。)(3年男子)」

10月7日 晴

青ジソが終わりなので刈り取り、雑草とともに堆肥場に積む。刈ったあとに畝作りをして、秋播きの種(大根、小松菜、野沢菜)をまく。

オクラの大きく堅くなった実(乾いている)を収穫。早じまいで雲谷齋へ移動。

前回収穫した青ジソを矢谷が大量に佃煮にしたものを、暑いごはんにかけて味わう。全員に少しずつ分けて持ち帰らせる。

「先週収穫した青ジソの実を先生が佃煮風に料理して下さったのをごはんでいただいた。とっても美味であった。みんなに分けて下さったので、いただいて帰り、今朝(8日)朝メシの時に食した。温かいごはんにととても合い、昨日以上にうまかった。一週間くらい楽しめそう。(3年男子)」

10月14日 雨

稲刈りを予定していたのだが雨のため中止。雲谷齋で、稲刈りの打ち上げのために用意しておいたオデンを先取りして食い話し合う。

巨大オクラの実をフライパンでいって石のスリ鉢で粉々にして試飲する。藤原先生の教示。コーヒーの代用品となる。矢谷が6月に畑の梅20kgをつけておいた「梅づけ」(干していない)を、20個ずつビニール袋につめて持ち帰らせる。

「雨で稲刈り中止。おでんはおいしい。稲刈りをした後に食べたらもっとおいしかっただろう。オクラの種取り。すり鉢で潰したものの、見た目はコーヒーっぽいですが、あんまりコーヒーの味はしなかった。梅干し分配、ちょっとしょっぱいかも……。でもおいしい。(3年男子)」「年輪の話が少し耳に残っている。樹も年輪を重ね風格を帯びてくると魂が宿っているように思われる。(3年男子)」

10月21日 雨

稲刈り、雨のため再び中止。雲谷齋へ集合。食とことばの問題について矢谷が発題してみなで話しあう。

「食についての話。現代人の『食』は危機的。もっと食を考えなければ。現代の言葉についての。(コンビニことば, 英語+日本語ことばなど)正しい日本語を使いましょう。時代によって様々な言葉が生まれる。(3年男子)」「『すごく』は大正まではひどいという意味。女学生ことばで、よいものにも、『すごくかわいい』というように使われるようになった。『がんばる』は本来『我に張る』自分を主張してゆずらないという悪い言葉だった。しかし明治以降、『自分を殺して、社会の基準に合わせて努力する』よいニュアンスのことばとなった。コンビニことば、『ご注文はこれでよろしかったでしょうか』『〇〇円からおあずかりします』」

10月22日(水) 曇

臨時緊急稲刈りを、予定したが雨でできなかった授業時間の翌日に行った。以下、社会人学生3年男子の記録。

「15日作業着に着替えて実習田へ。先生と私だけ。昨日の雨で田んぼが柔らかく仕事がやりにくい。それとヒエや草が多くてとても刈り難かった。16時30分を過ぎた頃からボツボツ助っ人が到着。18時頃になると暗くなり、稲とヒエの区別がつかなくなり極めて難渋した。車のヘッドライトの明かりで何とか仕事を進めて終わったのは19時。

それにしても学生たちは稲刈りをしたことがないらしく、記録するのもあほらしいほど、滅茶苦茶の仕事振りである、時間がゆっくりあって明るかったらしっかりと教えてやるのだが。稲木の組み方もいいかげん。必ず倒れるゾと言っていたら本当に倒れた。終了後、雲谷齋でナベをごちそうになる。スクールバスの都合でゆっくりしておれなかったのが残念。

10月23日(木)晴.....まだまだつづく、

9時過ぎに先生から電話。「稲木が倒れているので直しておいてほしい」山本君に電話しても

連絡がとれず。仕方がないので一人で修復した。やり直すのは倍以上の手間がかかるのを学生は判っていないのか！（社会人学生3年男子，59才）

11月11日 曇

実習田の脱穀を終わった稲ワラを田んぼにばらまく作業（翌年の肥料にする）と畑でエンドウ、絹サヤの種まき、チンゲン菜と青首大根の間引きをする作業を二組に分かれて行う。

柿の実が色づいてきたので柿の実をみんなにとらせる。先を割った竹ザオで取る者、木に登って取る者、思い思いのやり方とする。女学生も竹ざおで上手に枝を折って、実がとれると歓声をあげていた。たくさん収穫した甘柿の実を一人10個ぐらい分配して持ち帰らせる。

雲谷齋へ移動。90kgの玄米から地主さんが精米して下さった白米を1kgずつ学生に分配。米の銘柄は日の光。10kgほどのヌカはヌカ床と、肥料に使うことにする。

「日の光はさっそくその日にたいて食べた。（米は）普段実家から送ってもらっていて、それを白米と玄米1対1の割合で食べているので100%白米で食べたのが久しぶりだったこともあり、おいしかった。やはり白米のほうが白くキレイだし甘い。昔の人が食べたがった気持ち、白米にひかれた気持ちがわかる。……畑で目にとまったのが赤とうがらしである。（実に）上向きと下向きがあり、上を向いているのは辛く、下向きはそれより辛くはない。これを使ってペペロンチーノを作りたい。（3年女子）」

11月18日 晴

人参の間引き。イチゴの畝を作って来春のため、土に残っていた苗を植え付ける作業。茶色になった黒豆のサヤを枝から外して収穫する作業。柿の実の収穫と分配、余った実は研究棟の廊下に机を出して並べて、希望者に自由にもっていかすことにした。

「柿とり。まだまだたくさん実っていた。木に登って落とす人、また拾う人、とってもまだまだある。豊作である。いっぱい持ち帰った。甘くておいしかった。前日目をつけていた赤とうがらしを持ち帰った。（3年女子）」

11月25日 晴

今年の最後の柿の実収穫。人参、チンゲン菜の間引き。雲谷齋へ移動。柿の枝につるがはい上がって、たくさん実がなっていたハヤトウリを矢谷がヌカ漬けにしたものを試食。ヌカ漬け、発酵食品について講義。

「みんなが来て、柿の収穫を始めたので、そちらに参加する。柿取りの方が（間引き作業より）楽しくて面白い。……この畑の柿はとても甘い。うまく（見ばえよく）育てたら、茨木駅前です。……ハヤトウリはコリコリとした歯ごたえで、あっさりしていてとても美味であった。酒のつまみになりそう。（3年男子59才）」

12月2日 曇

雲谷齋で11月18日に収穫した黒豆のカラをむいて豆を取り出す作業を行う。黒豆は一人200gずつビニール袋につめて分配する。

[] 体験型学習の実践

「黒マメのカラをむいてマメをたくさん集めた。めんどくさい作業だった。(3年男子)」

「黒豆を分配した。私はピンとこなかったが、黒豆はかなりの高価であるため、親は喜ぶであろうと思った。(正月用の黒豆煮を) いつか私も作る側になるのだと思ったけど、そういう意識がまだまだ低いということに、少し反省の念を抱いた。(3年女子)」

12月9日 晴, 寒

矢谷が前日に剪定しておいた, 2本の柿の大木の, 大量の枝を集めて, マキにするため適当な長さに切って, サンの竹を並べてしいた上に, 積みあげ, ビニールシートを雨よけにかける作業を行った。

「カキを取りきった枝打ちをする。久しぶりにノコギリやナタを見た。寒くて手がまっかになった。あまりの寒さに火をたいた。幸せ。火は人間にとってなくてはならない。……赤とうがらしをいつものように見にいったら大きくてピカピカしたピーマンを見つけた。山本さんに肉詰めの話の聞いたら, やるしかないとピーマンを持ち帰った。1袋69円のものとは違い, 大きくて硬くて, 見るからに圧勝だった。(3年女子)」

12月16日 晴

畑の雑草取り。大根, 人参, 壬生菜などの間引き。梅の木の枝の剪定。畑のあちこちへ, 肥料(油粕)まき。雲谷齋へ移動。ハヤトウリのヌカづけ, みそ汁を食う。食医同源, 身土不二, 食品添加物のチェックについて講義する。

「ハヤトウリがシャキシャキしておいしかった。……ハヤトウリのみそ汁も飲んだ。みそ汁も本当においしかった。おいしいばかり言っていたせいも, ハヤトウリをおみやげにもらった。早速つくらないと。(3年女子)」

2004年1月13日 晴曇

畑に生えている作物や野草を集めて, 少し遅いが七草粥を作って, みなで食う。

「春の七草, セリ 時期早くて見つからず, ナズナ(ベンベン草) さがしたけど見つからず, ゴギョウ(ハハコグサ)よく判らなかつた,(実はあつた, 矢谷注), ハコベラ(ハコベ)

あつた, ホトケノザ それらしいもの(でも味は良くないらしい)(これは粥に入れなかつた, 矢谷注), スズナ(カブ) あつた, スズシロ(ダイコン) あつた。……漬物と一緒にいただいた七草粥はあっさりとしたタンパクな味でおいしかった。(3年男子59才)」

1月20日 晴暖

最後の授業なので, 畑で火を炊いて, ダッチオーブンによる鶏の丸焼, 人参, ジャガイモ, シイタケ焼きを90分かけて作る。3年生の山本君が料理の準備をしてくれていた。ダッチオーブンについての資料を配布, その歴史と性能を説明。自由に話をしながら賞味する。

「焼きながらする話といえば男と女の話。……現代において女性の自立(?)が目立つ。結婚適齢期はどんどん遅くなっていく。そして医療の発達と共に男児の生存率は高くなっている。こういった背景から独身男性が増え, 女性は選びたい放題ということか。そういった話をしながら,

原点に立ちかえって考え直す教育実践について

かたわらでたき火をたき……暖をとった。……チキンは少しこげはしたが、いい具合だった。ジャガイモ、ニンジンなど野菜がこれまたおいしかった。みんなでの初めての試みを終了させ、幸せ気分でフィールドワークの授業を終えた。(3年女子)

結 び

30年間余り大学の教師をしてきて、「自らの研究と教育を如何にしたら、自前の納得できるものに為しうるか」ということで悩んだり、模索し続けて今日まで来た。第 表に示した私の教育実践は、大学でのゼミや講義と並行して、学外でのキャンプ実習、調査実習、KJ法講習会、からだ・こえ・ことばのレッスン、フィールドワーク、野草を食う会、芋煮会などの形態をとってきた。

他のようではなく、このように、ここ、いまを生きることの責任は、すべて自らが引き受けねばならない。そのことは大学教員としての教育という仕事、研究という仕事、私人としての生活すべてにわたる人生の基本的事実である。

本稿では、私の「フィールドワーク」という社会学科としては常識的でない教育実践について報告したが、第 表に掲げた30余年のすべての教育活動が、私の研究活動の前進と相補的に展開されたものであり得たことに、私なりの教育と研究の総合のありかたについての手応えを感じている。本稿の読者が、一社会学徒としての私の「研究」の展開と「教育実践」の進展の相互関係に対する洞察を持って下さることを期待している。